様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　１８日現在

機関番号：31104
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：平成 23 年度～平成 24 年度
課題番号：23820044
研究課題名（和文）　中近世移行期の東北にみる大名の滅亡・改易と村の動向

研究課題名（英文）　About the downfall and demotion of the Tohoku district daimyo and the village trends during the transition from medieval to early-modern times

研究代表者
遠藤　ゆり子（ENDO　YURIKO）
弘前学院大学・社会福祉学部・講師
研究者番号：70612787

研究成果の概要（和文）：近年の村落成立論を踏まえ、戦国時代から江戸時代にかけて、東北地方に展開していた村落の関係史料を収集した。その上で、従来、東北地方は小百姓層の経営が未発達な後進的地域であるため、村落が成立していないとされてきた研究に再検討を加えた。また、大名の滅亡・改易といった戦争状態における村の動向を考察することで、大名の滅亡・改易の実態を明らかにするとともに、その際に様々な問題が生じていた意義を追究した。

研究成果の概要（英文）：Based on the village formation theory of recent years, I collected the village historical records of the Tohoku district in the transition from medieval to early-modern times. In the traditional ways of thinking, the Tohoku district is a backwards area and it has been said that the villages have not fully developed.
I reexamined such research. Moreover, I considered the village trends in states of war, such as the daimyo's downfall and demotion, and clarified the actual condition of the downfall and demotion of the daimyo. Also I investigated the meaning of various problems which had occurred during this period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１１年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１２年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：中世史・近世史

１．研究開始当初の背景
（１）　研究動向
①□村落研究
　かつて、村落はそれまで村運営から排除されてきた小百姓層が、経営を発展させることで村政への参加が可能となり、形成されるものと考えられてきた。そして、そのような村落は、畿内近国地域に特徴的な組織とも考えられてきたのである。
　だが近年、村落の成立意義と特色についての研究が進み、そのような村落理解は捉え直されてきている。村落とは、近隣と境目領域

などの権利をめぐる紛争を展開するなかで、村領域を主張しつつ、村としての権利を追究する政治的組織として立ち現れてくることが明らかにされたのである。

そのため、村の成立要件としての村請の研究も、中世・近世という時代区分の枠組みを超えて追究されはじめてもいる。このような研究動向を受けて、1990 年代後半には、関東地方においても畿内近国と同様の村落が成立していたことが指摘されるようになってきた。

しかし、本研究で取り上げる東北地方の村落については、ほとんど研究が行われていないのが現状であった。

②大名権力研究

戦国時代の大名権力に関する研究は、1980・90 年代に関東地方の各自治体史の編纂・刊行が多かった後北条氏研究を中心に進められてきた。中世後期研究は中世前期に比べ、活字化されていない史料が多いこともあり、自治体史の編纂・刊行状況と研究の多寡や進展状況は比例するところがある。

東北地方ではやや遅れて、2000 年代に入ってから『仙台市史』を始めとする自治体史が刊行され、近年は東北地方の大名権力研究も進展しつつある。だが、代表的東北大名といえる伊達氏ですら、関係史料の全体像は把握されておらず、権力構造も不明確な状況である。関東地方などに比べた場合、研究状況が遅れているという状況であった。

③村と大名権力の研究

後北条・武田領国などの研究が見られるが、東北地方では村研究がほとんどなく、村と大名権力との関係を位置づけようとする研究はほとんどない状況であった。また、戦争・改易による大名権力滅亡時の村の動向については、豊臣政権下の改易時の「一揆」が太閤検地反対一揆として論じられているのみであった。

（2） これまでの研究成果との関係

①□北地方の戦国大名研究

宮城県北部を領国とした大崎氏の基礎研究、南東北地方を支配した伊達氏・最上氏・大崎氏など、諸大名間の外交問題を明らかにした研究がある。そこでは、支配基盤とする村落については、史料的制約により追究することが難しく、考察できなかった。

②フィールドワーク調査等による中世・近世の村落研究

近現代の状況を把握するフィールドワーク調査によって、中世後期の村落まで遡って検討する手法により、史料の少ない東北の村落についても考察した。特に、岩手県一関市の調査に協力者として参加し（2006～2009 年度　基盤研究（B）池享研究代表「中近世移行期における鉱山開発と地域社会の変容に関する研究」）、中世後期の村の状況がわかる史料を発見し、聞き取りなどによる中世村の復元作業に携わった。

２．研究の目的

（1）概要

本研究は、東北地方に注目し、中近世移行期（戦国時代～江戸時代）における村落の実態を考察した上で、大名（戦国大名・近世大名）の滅亡・改易時に注目して、村と大名権力の関係性について明らかにすることを目的とする。

（2）東北地方における村落の考察

戦国時代は、村請を行う政治組織として村落が成立し、村を支配の基礎単位とする大名権力が成立した時期だとされる。だが、東北地方においては、戦国時代の村落の存在も、村落を基盤とする大名権力の存在も明確にされておらず、研究の遅れは著しい。

確かに東北地方には、村に関する史料はあまり残っておらず、分析対象とすることは難しい。だが、研究が立ち後れた理由は、資料の残存状況の問題だけではなく、従来における村落の成立理解とも関係がある。これまでは、小百姓層が経営を発展させることで村政に参加し、自立的な村落が成立していくと考えられてきた。東北地方では、小百姓層が江戸時代まで残存しており、後進的な地域であるとして充分な追究が行われてこなかったのである。

しかし、前述したような近年の村落成立論を踏まえるならば、東北地方の村落の存在についても改めて検討し直す必要があると思われる。そこで、まずは東北の村の実態を考察することを目的とした。

（3）村と大名権力の関係性の追究

村落を基盤とし成り立つ大名領国においては、村落が年貢・公事を納める対価として、大名の側も村落のために領主として何らかの役割を果たしていたことが指摘されている。

大名権力が戦争によって滅亡する、政治的理由などによって改易となるという事態は、そのような村と大名権力のあり方に大きな影響を及ぼすできごとである。領主の入れ替わりという事態に際して生じた、多くの矛盾を反映して起きたのが、「一揆」や「乱」と呼ばれるできごとであると考えられる。

特に、東北地方では、16 世紀末に戦国大名同士の激しい戦争が展開され、大名が滅亡す

る事態、また豊臣政権によって改易された大名の旧領国では「一揆」や「乱」が各地で起きている。そこで、それらの戦後、「一揆」・「乱」後の動向に注目し、その実態や要因を追究することで、村と大名権力の関係性を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

（１）史料の収集

①東北地方における村落関係史料の収集

東北地方、東北地方の大名と交流のあった地域の自治体で刊行している自治体史の資料編、資料編がない場合は中世の通史編を博捜した。村落関係史料があればコピーをし、地域ごとに編年の史料集を作成した。その際は、戦国時代のことを伝える近世に成立した軍記物語を含め、記録類についても収集した。

②他地域と比較検討するための史料収集

大名権力の滅亡・改易後の混乱は、東北以外の地域でも生じた現象である。それらを参考にし、また比較検討を加えるため、『戦国遺文』については後北条氏編・武田氏編・今川史編・房総編・佐々木六角氏編・古河公方編を博捜し、関係史料の収集を行った。資料はコピーをし、大名ごとに編年の史料集を作成した。

（２）文献の収集・整理

①東北地方の自治体史の関係文献

東北地方の自治体で刊行している自治体史通史編を博捜し、村・町に関する記述、戦争や「一揆」・「乱」に関する記述をコピーした。内容や分量によっては、自治体史を購入した。

②雑誌論文・書籍の文献

まずは、「CiNii」などのデータベース・サービスを利用しながら、東北地方の村落関係文献、戦後の村町状況や「一揆」・「乱」に関すると思われる文献を検索し、コピーするなどして収集を行った。

次に、東北地方のことが多く取り上げられていると思われる、東北などで刊行されている歴史関係の雑誌類を博捜し、データベース検索だけでは収集しきれない文献を集める作業を行った。

また、収集した文献の参考文献として、関連すると思われる文献が掲載されていれば、それらについても確認し、収集を行った。

なお、本研究を進める上で検討すべき課題、検地や惣無事などに関する文献も合わせて収集した。

③文献の整理（目録作成）

①・②で集めた文献の目録を作成し、整理する作業を行った。自治体史・書籍・雑誌論文それぞれのデータベースを作成するとともに、本研究を進める上で必要な文献についても課題ごとに目録を作成した。

（３）分析・論文作成

史料および文献を分析し、検討すべき課題を整理し、論文を執筆した。

４．研究成果

（１）主な成果

①東北の村落研究を進展させたこと

まず、文献を博捜することで、東北地方における村落研究の現状を把握し、課題を明確にすることができた。また、東北各地に点在する村落関係史料を収集し、史料集を作成することで、各地域のみの史料では判然としなかったことが明らかとなってきた。これにより、東北地方にも村落が存在したことが明確となり、東北地方の村落の特色を見出すこともできるようになった。

②「一揆」研究を進展させたこと

16 世紀末、豊臣政権によって改易となった大名の旧領国において起きた「一揆」のうち、旧葛西氏領国で、当時は仙台藩領となっていた東山地域（現岩手県東磐井郡）の「金山一揆」について再検討を加えた。

従来、文禄３年（1594）に同地で起きた「金山一揆」は、金を採掘する堀子たちが領主に対し、金山年貢高の減額を要求したもの、または「厳しい収奪」を訴えたものだと理解されてきた。しかし、この訴えはその年の「(金山)年貢」を出せないという年貢免除要求であり、それを集団で行ったために領主方に「一揆」と見なされたものだと考えられると指摘した。

その上で、年貢免除を訴えるに至った背景についても検討した。それまでの金山年貢の納入は、村に居住する大名被官など（土豪層）の家に、年貢を立て替えてもらうなどして成り立っていた。だが、葛西氏の滅亡とその後の「葛西・大崎一揆」という戦争によって、村・町は荒廃し、葛西氏に被官化していたような土豪層は滅亡する、または村から移住していたのである。

「一揆」が起きた文禄３年という時期は、金山年貢の立て替えなどをできる家が村にない、もしくは移住してきたばかりというケースが多い時期であった。つまり、既存の村が成り立つための構造が崩壊し、同時期は戦後からの再生・復興の途次にあり、賃貸―返済のサイクルも滞りやすい状況であった。そのようななかで、金を求めて諸国から集まった堀子たちによって、屋敷地や田畠まで掘り起こされるなどのトラブルも生じていた。金

山奉行へ礼銭を支払うことで採掘地から免れたり、それがくつがえされるなどの混乱も起きていた。
　そのような時期に、仙台藩領として伊達氏が管理していた金山は、豊臣政権による支配へと移ることとなる。このような領主の「代替わり」時期には、「世直し」要求が行われることがしばしばある。この「金山一揆」も、「代替わり」における「世直し」要求の側面をもつと考えられることを明らかにした。
　なお、この成果は単著「文禄三年の伊達領『金山一揆』―葛西氏の滅亡と地域社会」（共編『産金村落と奥州の地域社会―近世前期の仙台藩を中心に―』岩田書院、2012 年）として発表した。

（２）成果の意義
①東北地方における村落の成立を明らかにし、村の実態を追究する研究を進めることが可能になった。

②「金山一揆」を事例に、大名滅亡後の村の動向を考察することで、大名の滅亡・改易の実態を明らかにすることができた。また、村を基盤として成り立つ東北の大名領国のあり方について、その一端を明らかにした。

③①・②により、東北の中近世移行期研究を進展させることができた。

（３）今後の展望
①村町研究の推進
　戦国時代における東北の村町については、本研究の成果をまとめた、村町の成立と実態を明らかにした論文を用意しており、その発表を予定している。

②「一揆」・「乱」研究の推進
　従来の研究において、「太閤検地反対一揆」などと位置づけられてきた「葛西・大崎一揆」、豊臣政権に最後まで抵抗したとされる「九戸の乱」などの分析を行い、論文として発表していきたいと考えている。

③東北の大名権力研究の推進
　東北地方においては、戦国大名やその一族、家臣らの研究が充分に行われていないのが現状である。だが、村落側の史料を考察する上でも、支配者側の情報を整理することは重要である。
　今後は、それらの課題を克服するためにも、戦国大名・一族・家臣についての基礎研究を進めていきたい。まずは、戦国時代の村落に関する情報が比較的多い、蘆名氏、伊達氏に注目して分析を行いたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計２件）

① 遠藤ゆり子、他、高志書院、京郊圏の中世社会、2011、372（187～223）

② 遠藤ゆり子、他、岩田書院、産金村落と奥州の地域社会―近世前期の仙台藩を中心に―、2012、295（15～54、189～210）

６．研究組織
(1)研究代表者
　遠藤　ゆり子（ENDO YURIKO）
　弘前学院大学・社会福祉学部・講師
研究者番号：70612787

(2)研究分担者
　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
　　（　　）

研究者番号：